

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所

〒658-8501

神戸市東灘区岡本8-9-1

電話 (078)435-2331(ダイヤルイン)

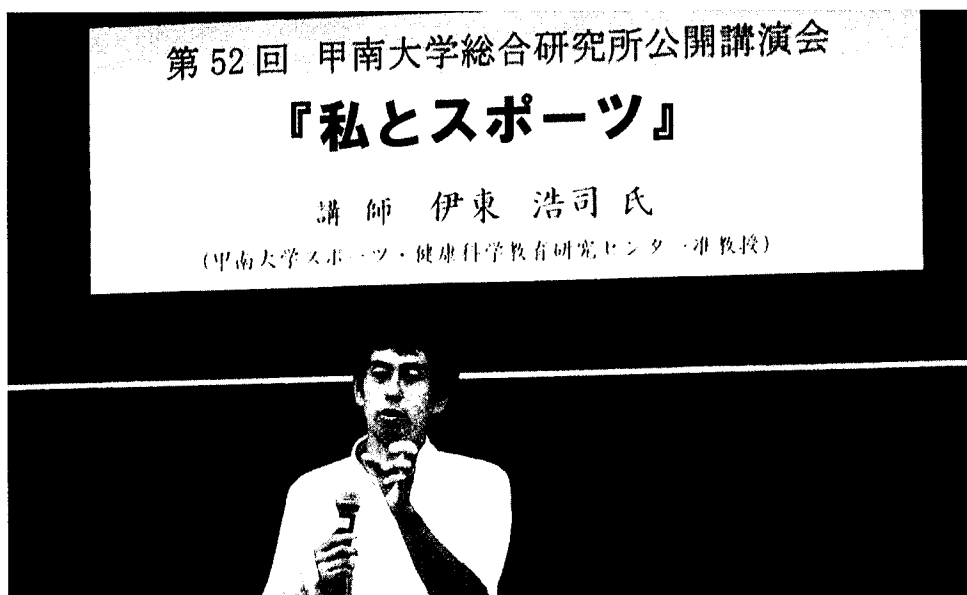
第52回 総合研究所公開講演会

「私とスポーツ——健康・陸上・オリンピック」

平成23年7月23日(土)

講師 伊東浩司氏

(甲南大学スポーツ・健康科学教育研究センター准教授)



伊東先生：

皆様、こんにちは。ただいま小谷先生の方からご紹介にあずかりました甲南大学の伊東と申します。本日は、このような場を与えていただきありがとうございます。短い時間ですがよろしく願いいたします。本日、このような場を与えていただき「健康と陸上とオリンピック」というテーマでお話をさせ

ていただきたいと思います。

そんな私ですが、健康というタイトルが一番初めにきていますが、一昨日から古傷のヘルニアが再発し腰が痛い上に、尿道結石の持病を持っており、それがダブルで今背中に響きわたっています。結石は1996年アメリカで突如苦しみに悶えて競技場で倒れました。現地の人々が近寄ってきて、どうにかしなく

てはいけないと思っていたら競技場にパトカーが来て現場検証になり「こいつは石持ちだと……」いうことになり、救急車で病院に運ばれました。救急病院で「石がある」と先生に言われて、股間の先にストロー状のものをさされて水分を取り検査をしました。その横に包丁で刺されて寝ている人の姿を見て、この病気になってはいけないと冗談ながら思った1年後、ドイツでトレーニングをしていた朝原君の家の近くに泊まって練習をしていたのですが、またそこで結石になってしまいました。今度は手術をしないと日本に帰らすことは出来ないとの現地の病院で言われ、自分は死んでもいいという署名をして日本へ帰ってきました。そしてすぐ慶應義塾病院へ行き、検査をしました。その当時は、今より10kgちかく痩せていましたので、筋肉が肥大しすぎて尿管を細くしてしまい、通常、普通に流れる石が流れにくくなってしまおうというような特異体質でした。当時は筋肥大で尿管を圧迫して石が流れないような状況だったのですが、今は、その頃と原因が異なり、毎日3回石の流れを促進する薬を飲んでます。石が出て、また、出来るのを繰り返すです。病院へ行って検査をしても、もう仕方ないと言われ現在に至っています。現役時代は、今と異なり痩せていました。その頃の体脂肪が5%くらいの時期でした。身長が180cm、75kg。体重をしばってやっていた頃です。現在は筋力が落ちて体重が5kgしか増えていないのですが恐らく体脂肪量はかなりの量増えているのではないかと考えています。2001年から甲南大学にお世話になっています。今年で10年目になります。それ以前は、2001年3月まで陸上競技選手として現役をしていました。先ほど小谷先生からご説明がありましたが、近くにしあわせの村がある神戸市のひよどり台というところで育ちました。幼稚園までは、ここからすぐ近くの青い鳥幼稚園に通っていました。父親が神戸製鋼だったこともあり、青木の社宅へ入っていました。現在、甲南大学の六甲アイランドで勤務をさせていただいています。いろんな事情があり、女子学生の指導をしています。本日このような場で話をするきっかけを与えていただいたのが、小谷先生からご説明がありましたが、1998年に100mで日本記録を出したからだと思います。その記録がこのしゃべっている瞬間にも破られるかもしれませんが12年間破られずにいます。長野オリンピックの開催の年です。ですので、今の大学生であれば生まれて何歳とかそういうレベル……かなり古

い記録です。レッドソックスで活躍している松坂選手もまだ高校生の頃です。松坂選手はまだ学生服で同じ表彰を受けていた頃の時代です。いつも言われることですが、一瞬だけ9秒99という記録がスクリーンに出ました。その時のインパクトが強く、現在もこのような講演の場に呼んでいただいているのだと思います。正式に言うと9秒997というのが正式記録です。陸上競技の場合は9秒991から10秒00までが10秒00になりますので残念ながら公式記録は10秒00で終わっています。それが現在も日本記録となっています。陸上競技の100mの歴史を紐解いていきますと、やはり走ることはすべての基礎だということのように、初回の第1回のオリンピックから陸上競技の100mは開催されています。本学の六甲アイランド体育施設のように、現在の走路は、レンガ色などのゴム走路になっていて、反発力が強くて前へ進み易いという特性を持っています。雨が降ってもスムーズに走れることが出来ます。当然のことながらこの第1回オリンピック大会のような土のグラウンドではありません。この当時は、土のグラウンドですが、今と違って時計回りにグラウンドを走っていました。そのため、今の100mのゴール地点からスタートをするような形になっています。6人で走るようになっており、東京オリンピック前まではオリンピックの入賞は6位となっていました。スタートも様々な形をしており土をスコップで掘ってクラウチングスタートをしているような選手もいれば、野球のスタートのような人もいて、色んな歴史を繰り返して陸上競技というのは現在に至っています。日本の陸上競技の歴史で、100mにおいてオリンピックで、唯一決勝に残った選手が吉岡隆徳さんです。暁の超特急と言われ、1932年ロサンゼルスオリンピックで6位に入賞されています。吉岡さんの記録が1935年に10秒3という記録でした。その当時の世界記録にもなっていました。この記録が28年間、日本記録として、更新されずにいました。その吉岡隆徳さんが指導して育て上げた選手が1964年の東京オリンピックで活躍された飯島秀雄さんになります。1964年10秒1という記録を出し、28年ぶりに日本記録を更新しました。東京オリンピック、メキシコオリンピックともに準決勝まで進んでいます。そのままプロ野球、東京オリオンズに入団して、陸上競技選手が代走要因でプロ野球へ入った第1号となっています。野球のルールは知っているが、盗塁は下手だったとご本人が言われており、成功率より失敗率

のほうが高く、残念ながら飯島さん以降、陸上競技から専門としてプロ野球に入っている人はいません。飯島さんが10秒1で走って、長らく日本の陸上競技界はこの記録が更新出来ず、朝原君に至るといふようなところ。この飯島さんにお会いして練習を見ていただいたことがあります。スタート練習に約5時間、指にマメが全部できてでも継続してスタート練習をする。一つのことにごこだわったらそれを徹底的に教えて、そしてやるというのがこの飯島さんの時代のトレーニングだと思いました。そういうトレーニング方法が日本のスプリンターの過去の歴史の中にはありました。現在の男子100mの世界記録は9秒58という記録でジャマイカのボルト選手が持っています。身長が196cmです。180cmとか170cmとかそういうレベルではありません。196cmです。非常に大きな選手です。100mのトータルで走ると歩数は何歩か分かりませんが、最大の歩幅ストライドは2m96と言われています。1歩が約3m。走り幅跳びではありません。普通に走って1歩が約3m近くですので日本人がどんなに頑張っても、ボルト選手が2歩行くところを3歩かけていかないといけない。ただストライドを伸ばせば速く走れるかというところという問題ではありません。9秒58ですから普通のストップウォッチで測ると9秒3くらいで走っています。超次元のスピードで、私はボルト選手とは現役時代かぶさって走ったことはありませんが、恐らく一緒に走ると頭の上ぐらにおしりが通っていくようなイメージだと思います。私はカール・ルイス選手と走るチャンスがありましたが、カール・ルイス選手の身長は186cmで、私より約6cm身長が高いのですが、カール・ルイス選手が横を走り抜けていくときには、目の高さ辺におしりが通過していくようなイメージがありました。それぐらいスケールの大きな選手でした。昨年までは黒人選手しか100mを9秒台で走ったことはなかったのですが、フランスの20歳のルメートレ選手が初めて黒人以外の選手で昨年9秒98という記録で走りました。このルメートレ選手も20歳といえども身長が189cmもあります。現在、日本で一番速い江里口選手は、180cmはありません。世界のスプリンターは、大柄化しています。このルメートレ選手は、今シーズンに入っても9秒台を5回連続出していますので、世界トップクラスの選手になりました。日本人男子が100mを9秒台でいつ走るかというような話題が多々ありますが、どちらかというと、女子100m

の飯島さんが10秒台で走る方が、もしかしたら先になってしまうかと思うくらい、日本男子100mの記録は停滞をしています。私はオリンピックに3度日本代表として選んでいただきました。実際に出場したのは2大会です。この1回目のバルセロナオリンピックはリレーメンバーで行ったのですが残念ながら現地に行って走ることが出来ませんでした。補欠のまま帰ってきました。一応日本代表に選んでいただきましたが、何をしに行ったのかという思いでした。妻とこの大会で知り合い、その後、結婚をしました。アトランタオリンピックは1996年ですが、こちらは200mと4×100mリレーと4×400mという3種目に出場させていただきました。2000年のシドニーオリンピックは100mと200mと4×100mリレーを走らせていただきました。恐らく日本短距離界の中で、一大会で一番多く9レースを走らせていただきました。そのときのリレーは、私は2走を走り、アンカーが朝原君で、3走は末續君でした。二人とも北京オリンピックのメダリストで、その二人と一緒に走る機会を設けさせていただきました。2004年のアテネのオリンピックはテレビ解説をさせていただきました。この頃はまだ現役の気持ちが少し残っていましたので、記録を抜かれたくないとかそういう気持ちは若干ありましたが、2008年北京オリンピックになると現役を辞めて年月も経っていたので、3位入賞に関してどうこう思うというよりすごいことだという気持ちが強くありました。ただ、この末續君と朝原君というのは人格者で、特に過去で頑張られた所先輩方の土台があったということ必ずインタビューで言ってくれました。その背景から過去のスプリンターの人も二人を祝福している状況です。私個人としては、この1996年のアトランタオリンピックではこの朝原君のバトンを失敗して失格して、2000年のシドニーオリンピックはこの末續君が途中で怪我をしてしまいバトンがギリギリ渡って6番だったということで、この二人にある意味陸上競技を続ける要因を作った大きなきっかけではなかったかと思っています。私自身、現在講演をする機会があったり、アジアの国を回って陸上の普及活動に取り組んだりしています。2009年3月30日から神戸市の教育委員をやらせていただいています。スクールミーティングで上筒井、本山第一小学校などへ行き、学校評議委員の方やPTAの方とお話をする機会などを得ていたり、各学年の授業を見て授業がどうなっているのかか給食を食べたりというよう

なことをさせていただきました。それ以外は、いきいき生徒会会議という神戸市立中学校の生徒会長が集まる会議の発表を聞いたり、神戸市立小・中学校の教科書が変わりますので、その教科書の採択をしなければいけない重要な仕事があります。それとは別で、今月の初旬にはアジア選手権が神戸で開催されました。この大会でもテレビ解説をさせていただきました。教育委員会絡みでいうと、2011年11月20日神戸マラソンがあります。抽選で落ちた方、受かった方、多数いらっしゃるかと思いますが、身体に注意して走っていただければと思います。私はインターネットで申し込んだのですが残念ながら落選をしてしまい泣く泣く出場出来ません。出場される方は是非がんばっていただきたいと思います。それ以外に取り組んでいる仕事は、外部指導員を増やそうという働きをしています。スポーツの世界などでも地域普及活動というものが盛んにはなっていますが、スポーツの世界でみると、活動そのものが増えても何の意味もないというようなことが現状としてあります。陸上競技の場合は中学校の部活動に登録していなければ大会に出られないというシステムになっています。そのような中でクラブチームだけを先行しても大会に出られないという現状があります。この部分をどう改善する必要があるかを取り組んでいます。神戸市の教育委員会では昨年ランナーズスクールを実施しました。いろいろな子ども達に走るきっかけの場を与えるという活動をしていました。私自身も末續君などが言っているように、基本的には考えることはまるきり一緒です。基本的には、いろんなスポーツが楽しい、という現状を大切にしていきたいと思っています。いろんな練習方法とか栄養管理などの情報や、技術論がたくさんあります。そういうものは、陸上競技を本格的にやっていってその年齢に必要な時に考えればいいというのが私の持論ですし、末續君も同じようなことを言っています。とにかく小学校のときは走ることが好きになればいい、運動することが好きになればいいというような考えで、現在も活動をさせていただいています。技術などは、陸上競技の場合は25歳ぐらい過ぎてからやっていけばいいと思います。この段階ではあまりいろんな練習方法とか栄養のことを考えすぎないようにしていただければと思っています。もう一つは学生を送り込んだ関係で住友電工さんの社会貢献にも協力させていただいています。住友電工さんのある伊丹市はプロ野球選手のすごい

選手がたくさん出ているのですが、陸上競技の場合はどんどん競技人口が減っています。3年前は300人くらい中学生が陸上競技を実施していましたが、今は200人前後くらいしかいないという現状があります。住友電工の社長松本さんは陸上競技出身ということもあり、住友電工の社会貢献活動を協力させていただいています。現在、陸上競技の本を出したり、テレビ解説など様々な仕事をしていますが、強化グループよりも、私は施策・制度を変える方のグループにどっぷり入っています。スポーツの方もスポーツ基本法が出来、これによって学校のクラブ活動がどうなっていくかというのが非常に難しい局面に入っています。神戸市、日本陸上競技連盟でもそのような活動をしっかりやっていきたいと思っています。兵庫県の人権大使もやっています。人権という括りは非常に広くて意味合いは難しいのですが、その大使をやらせていただいています。8月20日姫路で全県大会であります。もしよろしければ足を運んでいただければと思います。私自身が今、理論実習で取り組んでいることですが、今までの日本のスポーツ界は、底辺に多数の選手がいて、頂点にトップアスリート選手がいる。トップアスリートが活躍すると、底辺が増えて競技人口が増えていくというピラミッド型の構造になっています。今の韓国の陸上競技界がこのシステムにあたります。このシステムでいくと、確かに人気のあるスポーツは、このシステムでいけるところもあります。わかりやすい例では、過去の日本のプロ野球球団などが、このシステムであたるのではないかと思います。一方、Jリーグになるとこの裾野よりも上の部分を広げていこうと動きがあります。スポーツとは体を動かすというようなイメージが多くあると思いますが、スポーツといってもスポンサーになるのもスポーツに関わることになりすし、カメラで写して映像に流すメディアもスポーツに関わる分野になりすし、レフリーとか指導者、そしてトップアスリート、そういう人もすべてスポーツという括りになります。そのようなスポーツにかかわることが人を出来るだけ多く獲得することがそのスポーツの裾野が広がっていく要素になると思います。ボランティアというと、どうしても日本では何かペナルティとか希望者を募ってやるような形になりますが、スポーツの裾野が広がると、そういう概念がなくなるといわれています。台形を逆にしたような運きを日本陸上競技連盟でも出来るだけ多く実施しています。エリート

構想というのはどんなスポーツでもありますが、エリートというのはこの陸上競技では早熟で終わってしまう傾向があります。このようなアプローチでなく、逆台形モデルのようにスポーツをするきっかけを与える活動をしています。ピラミッドの活動であれば、うちの大学へ来て施設を使ってください、うちの大学生が教えますというのですが、様々な場所へ自ら足を運んでスポーツのイメージアップ、楽しさを伝えていくということがきっかけ、裾野を広げていくという意味で非常に重要です。Jリーグの選手はいろんな小学校に行って、ボールを蹴ったり、給食を食べたりという活動をしています。今までのプロ野球でしたらスタジアムに来てくださいだけでしたが、自ら活動していくというのが今のスポーツの現状になっているかと思います。午前中、この場にきている学生と一緒にヴィッセル神戸アスレチッククラブを実施してきました。その発想としては、私は高校生まで神戸市の北区に住んでいました。プロ野球阪急ブレーブスと同じグループのスイミングスクールに小学生の頃通っていました。この阪急スイミングスクールに入ると、阪急ブレーブス子ども会の会員証を作ってもらって子どもたちは西宮球場での試合を観戦することが出来るという特権がありました。今のヴィッセルさんは年に二試合無料で、試合を観戦することが出来ます。水泳をやっていて、無料で野球を観戦出来る、スポーツの裾野を広げるというきっかけがそこにはありました。私が野球を好きになったのは阪急ブレーブスの試合を無料で観戦に行けた、そこで観戦した野球はいいなというきっかけになりました。その当時は水泳とサッカーをやっていました。そのようなベースが過去にあったので、スポーツをやるきっかけを子どもたちに与える場を作りたいと思い、ヴィッセルの社長に話をしたところ、即答でやりましょうという返事をいただき、現在に至っています。同じく日本の陸上競技の場合はどうにか陸上競技の人口を増やそうということで、小学校では、授業の中で陸上競技という種目を、できるだけ多く入れてもらおうという活動をしています。中学校では部活動で陸上競技ができる環境を増やそうという活動をしています。私の出身中学の鶴台中学校には現在陸上競技部がありません。中学校の部活率を確保するために、なんとか陸上競技をやりたい、スポーツをやりたいという場所を出来るだけ確保しようと陸上競技連盟は頑張っています。そのことを一番実施しているの

がサッカー界です。見よう見まねでやっていくしかありませんが、先ほどのモデルケース、選手、指導者、審判、役員、ファン、をたくさん集めて活動しています。先ほどの構想をヴィッセルの社長に話をすると、Jリーグの100年構想、100年かかってやることかもしれませんが、サッカーに限らず、やりたい競技を楽しめるスポーツクラブをつくりましょうということが、サッカーの理念にあるので、これをもとにアスレチッククラブというものを立ち上げさせていただきました。ともかく、阪急ブレーブス子ども会をベースにして、スポーツを始めるきっかけ、主催はJリーグのほうでやっていただいています。クラブの協賛として、ヴィッセルさんが持っているスポンサーの力を借りて、子どもたちに様々なものを特典として提供していただいています。会員証を発行してTシャツを作っていただいて、アシックスさんの協力で陸上競技のスバイクを一回履いてみると体験させることが出来ました。道具を初めて使うという経験は一生忘れられないとおもいます。そういう経験の場を提供していただいたり、そして、ヴィッセルさんの試合を二試合、生でプロの試合を観戦させていただき、子どもたちをビジョンに映してもらい、忘れられない体験をさせていただきました。また神戸製鋼のラグビーの試合も観戦させてもらいタッチラグビーを経験してもらう予定です。陸上競技だけをやってもらおうという考えは全くありません。ラグビーやってもいい、サッカーやってもいい。逆にサッカーやラグビーをやっている子も陸上競技に興味を持ってもらったらいいというような活動をこの場でやっていこうと思っています。次回8月の上旬には、明治製菓さんの栄養講習会、その後は保護者のビデオの撮り方を神戸新聞社に教えていただくという企画を考えています。ヴィッセルのトップのチームと色は全く一緒にデザインが若干違うTシャツを使って活動をしています。同じものを使っているということだけでトップの選手に興味を持ってもらえればいいと思っています。それぞれのスポーツには、様々な魅力があると思います。何らかのきっかけをスポーツでもってもらえればと思っています。現在、オリンピックなどのテレビ解説もしています。大阪の世界選手権も活動をさせていただきました。様々な国のテレビ局が放送のために来ますが、私もその中の一人として解説をしています。今回のアジア陸上でも解説をさせていただきましたが、基本は褒めて褒

めちぎる解説をしようと心がけています。スポーツの世界では先輩はなかなか後輩を認める意識にはならず、私のレースに対する当時の解説者はほとんど酷評の酷評……自分で聞いていても不愉快になるぐらい欠点を探される解説ばかり受けました。とにかくいいところを見つけて褒めて、周りの人が気持ちよくなる、職場の人が明るくなる解説をしようと心がけています。私が現役のときは試合から帰ってきたら、あの解説者は一体なんだと職場の人によく言われました。どうしてあなたをそんなに酷評するの?というようなことをよく言われましたので、できるだけ褒めて解説をしようと思っています。この間のアジア選手権もそうなのですが、競技場に人が全くいないときも、私どもは放送席で目の前に映っているモニターにめがけて解説をすることが多々あります。競技がやっていない時間帯に録画のVTRを見ながら競技の良さをそうしています。また、LIVEと画面に出ていない場合、全部録画取りです。テレビの解説では、基本的に天候を言わない、時間帯を言わない。これはもう鉄則になっています。今日はいい天気ですねと実況者が言わない限り、どのような編集になるかわからないので、事前に番組構成がわかっていない限り言わないようにしています。このあと室伏君が出てきますとか、そういうことも言わない方がいい。室伏君が予選で落ちたらその映像は流せないで、その分はこのトラック種目をひっぱって、ひっぱって、ひっぱって放送をするのでテレビの世界というのは難しいです。雨が降っているのに突然晴れたり、そういうことはまれにあります。テレビというのはいかに視聴者を引きつけるか、目玉選手が予選で通ったら次はこのバージョンで放送、落ちた場合は次どの種目へ行くというようなことになっています。このようなテレビの裏事情が多々あります。私は世界選手権、オリンピックで世界記録が誕生したレースの解説に当たることが多いのですが、できるだけ絶叫タイプの解説にならないように、解説は大学の先生が多くいるので、ここは知的にこうと、大学教授が大声出さないようにしようとテレビの前の人にわかりやすくすることをお互い取り決めをしています。絶叫するのは簡単なのですが、それを抑えて冷静に冷静という風に毎回やっています。今年のテグで世界選手権がありますが冷静にいきたいと思っています。実際に、ボルト選手の19秒19の世界記録を出したレースも解説をしました。この記録を2で割ると

100mのタイムになってしまいます。要は10秒かかってはいけないと、かかたら出ない記録だと思っていざしたら、いかにすごい記録かというのがお分かりになるかと思います。日本でいろいろな経験をさせていただき、世界でもいろんなところに行きました。これは、10年ほど前のことですが、スイスの大会行く機会がありました。国際大会といってもスタンドはなく、審判の人は半そでに短パンです。要はボランティアというより自分たちで大会を作り上げようという意識が非常に強いので、非常にラフな格好の方が多い。また、飲食をする場所があるところが多いです。

ちょうどスイスの大会は、朝原君と一緒に試合に行ったのですが、日本のワールドカップ出場の試合がちょうど放送をしていたので、それをみながら準備運動をしました。スポーツをみることによってスポーツに参加しているという感覚をヨーロッパの人は持っています。日本は今度のスポーツ基本法ではありませんが、今まで健常者とそうでない場合は所轄が異なっています。多くの外国でレースは、車椅子のレースなどがあって、そのレース後、健常者のレースがあったりします。日本では、考えにくい様々なことが世界ではあります。私はある大会のときは出場者の寄せ集めのリレーに出場し、地元のサッカーチーム、サッカーのプロの選手と競走をしました。ビール片手に応援するのがヨーロッパの小さな大会の主流になっています。私は中学校一年生から陸上競技を始めました。小学校までは、陸上競技以外の様々なスポーツやっていました。特に、サッカーには熱を入れていました。初めて買ったスパイクは、アシックスのサッカーでした。中学校には、残念ながらサッカー部がなく陸上競技部に入りました。始めて、試合に出場したのが、王子公園で、体操服で出場しました。私は陸上競技部に入る予定はありませんでしたが、その当時は、神戸市立中学校の男子全員が、丸坊主でクラブも全員入らなくてはいけない時代でした。バスケット・写真部・バレエ部を申し込んで陸上競技部に見事当選いたしました。クラブに入る前に大会エントリーそしてスパイクを購入していました。今の教育現場では、考えられないことですが、先に物を購入してからの入部でした。とりあえず一回履いてみなさいといってグラウンドで履いて、気持ちいいと思いました。あの時の感覚は一生忘れることが出来ません。私自身、特化して足が速かったわけではなかったのですが、入

部していたサッカー部の中では比較的足が速く、つい最近3月まで中央区で校長先生をやっていた先生に強引に陸上競技部に入部させられたのが事実です。中学校では、当時、一番高いアシックスのスパイクを履けるような選手になりなさいと言われてました。24,000円です。30年前に。その靴を履ける選手になりなさいと言われて、見渡すと日本のトップの選手は皆このスパイクを履いていたので、こういう選手になりたいと純粋に思いました。私は難しく考えずに、こういう風になりたいと思うところからすべて始まっていきます。でも残念ながら24,000円のスパイクは非常に高額で手が届きませんでした。13,000円というスパイクを購入しました。当時、神戸市で一番強く全日本中学で優勝した方が履いていたスパイクと同じモデルを、まねをして購入しました。中学校3年生の時、東京でジュニアオリンピックという試合がありました。そこで、400mで日本一になりました。どうして400mをやったかという100mだけだったら旅費がもったいないから行かせないと中学校の先生に言われ、一度400mやったら行かせてやると、予選落ちしても100m・400m併せて500mですから、そしたら旅費出してやるというような発想でした。でも私、スーパー中学生だったので。見事2試合目の400mで全国制覇をしてしまい、100mも3位でした。14歳中学校3年生の時、100m10秒7で走り、200mでもこの当時の中学記録を出して、私は中学校3年生のときは100m、200mが中学ランキング2位。400mが中学ランキング1位というスーパースターでした。何をやってもうまくいっていた時代で、これを出さないと試合に連れていけないとか、言葉によって道しるべをつけられていた選手だったと思います。苦勞知らずで、エリート街道を歩み、報徳学園に進学しました。神戸市立鶴台中学校から報徳学園に進学したのが、私が初めてだったのですが、その当時の陸上競技部の顧問鶴谷先生から、当時報徳学園が全国高校駅伝2連覇中でしたが、短い距離でも一番になりたいと、報徳にきなさいと、野球のユニホームもカッコいい、スポーツも盛んだと思って、報徳ってすごいだろうと思い進学しました。3年間報徳学園で心の教育をしていただきました。野球は、甲子園出場など現在頑張っていますが、私たちのときは3年間のうち2年間が出場停止でした。同級生に大阪桐蔭高校で監督をしている西畑さんがいます。このような環境の中、報徳で一生懸命野球をし、高校届

指の指導者になっています。報徳学園陸上競技部全盛期の頃で、全員が高い目標で頑張っていました。報徳は二宮金次郎さんの考えをもとにスタートした学校です。報徳という言葉、徳に報いる、この言葉は二宮金次郎さん、小田原を復興させるときに使われた言葉です。小さな努力の積み重ねが大きな発展へつなぐと、高校時代しっかりと教わってきて、現在に至っています。余談になりますが、入学式のときに二宮金次郎さんの銅像をいただきます。アジア大会の最優秀選手賞をいただいたときも、1m20cmくらいの二宮金次郎さん、ヒノキです。なかなか手に入らなぞ、と校長先生に言われて、現在、実家の玄関に置いています。私自身、14歳で100m10秒7、その後、自己最高が10秒00でした。14年間で0.7秒短縮するために、距離にすると5mを縮めるためにどうすればいいかということを常に考えていました。大学は、東海大学という大学へ進みました。高野進さんがいる、日本で一番強い人がいる学校へ行きなさいと、入試のときに荷物を全部持って東海大学に行きました。合否も関係なく、入試を受けてそのまま東海大学へ入りました。当時、100mの日本記録を持っていた人も東海大学で、200m、400mの日本記録保持者がこの高野進さんでした。高野さんは、世界選手権で7位、オリンピックで8位になって、それを奥様が見て感動し、歌にもなりました。そして、富士通に就職をしました。28歳で10秒00で走りました。当時としては30歳前で記録を出してすごいといわれていたのですが、朝原君が36歳くらいまで競技やっていたので、朝原君の北京オリンピックを境に急に30歳で辞めた伊東はどう何？と批判の対象となっています。もっと長くやっていたらよかったのにとあちこちで言われていますが、私としては精一杯頑張った時期でした。現役時代、記録を出した背景としては、今まで日本の陸上競技界がやってきたことを疑ってみる。どうして腿を高く上げて走れるのか、というようなことを考えました。スタートもどうしてあんなスタートをしないといけないのか。アメリカのモーリス・グリーン当時世界記録で走ったオリンピックチャンピオンです。その選手がスピードスケートのスタートと同じようにスタートをしていました。日本では考えられない陸上競技の理論でしたが、そのモーリス・グリーンがベースにしていたのが、長野オリンピックで優勝したスピードスケートの清水選手のフォーム、スタートで、そして練習方法をすべて取り入れていたとい

うことで、他のスポーツから何か取り入れることがないかと考え出したころから結果、記録が向上しました。あとは、人間の進化をたどってトレーニングするのはどうかとも考えました。私たちのころは体操をやって腕を振って腿を上げれば速くなれると1990年代前半まで考え、言われていました。肩甲骨をやわらかくする股関節を動かすと言うと何を言っているの？と言われた時代です。肩甲骨を動かすなんて、あなた野球やるの？と真剣に科学者の先生に言われたこともありました。現在は肩甲骨を動かすなんてことはごく一般の当たり前のことになっているのですが、それをどうしてやろうと思ったのかというと、人間はもともと四足歩行の動物から進化していったところなんです。私が現役時代、肩甲骨をしっかりと動かしていたので、腰痛というのが現役時代にはまったくなかったのですが、このような仕事をしてそういった意識が薄くなるとそういうものが多々出てきます。見落としがちですが、肩甲骨を動かすというのは非常に重要になっています。その裏には呼吸筋というものがあります。そこを動かすことによって新しい血液が流れていくというシステムになっているので、食事を抑えていたり、ウォーキングをしているのに体重が落ちないという方は、一度背中周りが張っていないかチェックしてみてください。背中周りを動かすと、血液の流れが良くなって代謝が良くなります。体重が落ちやすくなるのではないかと思います。サルというのは立つとこのように、しっかりと地面を押して歩くようになります。人間は背中を丸めると足は後ろにしか動かないようになっています。前回りをすると足は後ろへ行ってしまいます。頭を下げると、足は必ず後ろへ流れて行ってしまいます。姿勢を良くして歩くことによって、スムーズにジョギングやウォーキングができやすくなります。どうしても下を向いて歩きたくなってしまうのですが、姿勢を良くするということはすべて良い方向につながると思います。今日も息子と朝一番でラジオ体操をしてきましたが、これを真剣に継続して毎日10分実施したら、体重は落ちると思います。これほど、全身運動をしっかりと取り入れているものはないのではないかと思います。日本の体操というのは過去を思い返してしまうと何とか主義とかになってしまうと、どうしてもストレッチ運動のほうになってしまうのですが、体操をしっかりとやっていたら、運動も怪我なくしっかりとできるのではないかと思います。現役時代よく言われていた

のですが、足ゆびをしっかりと伸ばしましょう、足ゆびをしっかりと伸ばすことによって、疲れが早くとれます。これは、マニキュアを塗るときに使うもので100円均一や雑貨店で売っているのですが、足指元気くんというものです。これを現役のときに使っていると云ったら、伊東はマニキュアを塗っているのじゃないかと、新聞で大きく取り上げられたこともありました。足ゆびを開くことは非常に重要です。特にハイヒールを履いている人や外反母趾の人はこれを使うことで足の裏の筋肉が発達しやすいのはいかと思えます。そして、足指ソックス。アスリート用はなかったので、ホームセンターで売っているものを使っていて、競技用を作っていただきました。あとは、匂い。晩年はスポーツアロマというところに大学の先生の紹介で通っていましたが、匂いから動作を変えていくということも非常に重要なことだと思えます。また、戦前のアスリートの方の自伝を読むと、必ず不調になったときは、足袋で足の裏の感覚を呼び戻すと書かれています。裸足で歩くことも重要かと思っています。以前は、底の厚い靴を履いていましたが、太極拳のスパイク、これが足の裏の感覚を養うために調度良い薄さだったので使用し、記録が向上していったので、ソールの薄さ約7mm、出来るだけ素足に近いシューズを最終的に使用していました。話はかわりますが、常識が常識じゃない。よく運動会のときはコーナーのぎりぎりを走りましょと、ボルト選手、世界で一番速い選手の写真を見てわかるように、コーナーをべつにぎりぎりに走っていません。車の運転と一緒に。ボルト選手の場合は急なコーナーをスピードを落とさず遠心力で振られても、スピードが落ちないように走るのが彼の特徴です。横のイギリスの選手マルコム、私が現役のときよく一緒に走った選手ですが、マルコム選手の心理的には、ボルト選手からぶつかわれるようなイメージで走られていてとても気の毒だと写真を見て思えます。ボルト選手、コーナーに対して体を傾けます。幼稚園児でも裸足でしたらしっかりと地面をとらえます。裸足は非常にいいと思えます。膝の角度が横から見て4、4の字の角度で腿を上げると非常にいいと言われています。4以上上げる必要はないとも言われています。4と1の理論というのが、今、スプリント界で言われ出して、4-1理論、膝の角度が4で、軸足が1になるように、あまり腿を上げなくていいです。地面をしっかりととらえましょう。幼稚園児はしっかりと出来ま

す。ボルト選手みたいに走るの、足の裏が横側から入って内側に入っていきます。裸足で家を歩いたり、外を走ったりすることで自然と出来るようになります。私の妻は、世界選手権のマラソンで優勝しています。我が家には2人の息子がいます。2人の子どもがどちらに似ているか、短距離と長距離の間、800mや1500mが強いのだろうかとかよく言われます。人間の筋肉には速筋と遅筋があります。間はありません。短いのが速いのか、長いのが速いのか、選択を間違ったら大変な運命になります。子どもを育てて思うことは、言葉のもつ大きさに気づいてきます。お父さん、お母さんが足速いのに、どうして運動会遅いのだとか、そういうことを言われて家で練習してこいと言われるのが非常に嫌みたいです。運動会の時、6年生くらいの先生が、生徒がぼろっと、あの子のお父さんは速いよとか、あいつのお父さん速い……というのを聞くのが嫌だと……。言葉は難しいと感じています。しかし、子どもの靴には、注意をしています。足は命ですので6歳でもしっかりと、アシックスにいた三村さんに靴を作ってもらったこともあります。最後になりますが、私の成功した事例を少しだけご説明します。食べ物の好き嫌いをしないというのを高校のとき教わり、別の意味ですべての面で好き嫌いをしない。そうすると様々なケースでイレギュラーなことが起こったときに対応ができやすくなります。嫌なことでもやってみるということと、世界へ出て行くときに5秒間挨拶をするだけで言葉が通じない国の人でも友達になれることが多々ありましたので挨拶をしっかりと、自分の体を真剣に考えると、みなさまの年代になりますと健康診断のデータとか出てくると言います。そのような数字を見て真剣に自分の身体と向き合うと、自分の身体こう変わっていくのだという楽しみが非常に多くてでくると言います。そういう意味で体操・ストレッチ運動というのはすごく重要です。頭の体操・ストレッチもあれば筋肉のストレッチ運動もあります。ウォーキング、ジョギング運動をするよりも体操・ストレッチ運動をして汗をかく。これほど充実したものはありません。テレビを見ながらストレッチ運動。私の場合現役のときはビールを飲みながらストレッチ運動。何でもいいのです。身体を少し動かして、あっ今日は動く、あれ、こっちは硬いということを知るということは、すごく自分の身体を知る意味で数値以上にいいものがえられると思います。現役時代あまり大きな波を作らず

試合で勝てる時は100%を求めませんでした。とにかく80%だけ。80%まで自分の状態を持っていて80%の力を出せばいいという風に思ってたががんばっていたら、100%以上の力が出ました。あともう一つは、挨拶同様に、コミュニケーションです。これは韓国に行ったときですが、誰とでもしゃべれる。どういう境遇にあっても人としゃべれる能力が非常に重要だとかんじています。基本的にスポーツは表現は自由ですが、今の子供達が忘れていているスポーツは、ルールとマナーによって保たれているということ、出来るだけ言い続けたいと思っています。あと、陸連でも言っているのですが、みなさんの身近な人で、テレビのドラマでもそうですが自分のことを私とさえ言えない子が非常に多くなっていませんか。大学生もですが、下の名前だけで自分のことを平然と言います。例えば、神戸花子さんの場合、花子はね、花子はねと。心理学の先生に聞いてみると、そういうのは2、3歳時の経験が頭から抜けていないと言われました。その感覚でスポーツをやっていると、やはり何か考える時には2、3歳時というのが邪魔をして成長しないのかと思うことがあります。あと、間違っている言葉をできるだけ直す。私は世界へ行って思ったことです。外国でファイトと言うと外国人選手は今から何をするのか。今からケンカするのかと、走っている選手にファイトと言うと、戦う・戦闘する・ボクシングをするという意味になります。和製英語の難しさ、韓国行くとファイティンになるのですが、外国で使うと笑われることがあります。応援するのではなくて戦えという風になってしまいますので間違わないように教えていくと社会に出たときにいいのではないかと考えています。その他、言葉にはいろんな意味があります。皆様も言葉の意味を考えて行動していきましょうということです。長くなりましたが、私の経験を中心に少しお話をさせていただいて、話を終わりにさせていただきます。本当にありがとうございました。

〈以上は2011年7月23日(土)甲南大学132講義室において開催された講話に基づく〉

平成22年度研究チーム活動中間報告（第2回目）

「新発見された強相関物質における超伝導発現および金属絶縁体転移の機構解明」

No.114 研究幹事 山崎 篤志（理工学部）

【研究の意義と研究の進捗状況】

我々が研究の対象として選んだ強相関物質は、生活上、身の回りに多く存在している鉄や銅（金属の代表）やシリコン（半導体の代表）と比べて肉眼での見た目では大きく変わらないが、ミクロな原子構造からマクロな物理的性質（電気や熱の伝わり方など）まで数多くの点で劇的に異なっている。「強相関物質」という名前は、物質内部に無数に存在している電子どうしの相互作用（相関）が強い物質（銅やシリコンではこの相関は無視できるほど小さい）である事に由来する。主にエレクトロニクスの分野において、強相関物質群が現在の半導体や電線の代替物質として実用化された場合には、我々の日常の生活が根底から変化する可能性がある。その代表的な例が、高温（とは言っても、一般的な感覚では極低温であるマイナス100℃以下）において発現する「超伝導」である。超伝導は、今から約100年前に見つかった物理現象であり、一般には物質中で電気抵抗がゼロになる現象を言う。これは超伝導になった物質を電力送電用のケーブルとして用いるとどんなに遠くまで電気を送っても、無駄な電気エネルギーの損失が起こらないことを意味する。我々がよく知っている鉛や水銀も約マイナス266℃とマイナス269℃（絶対温度で7ケルビンと4ケルビン）以下で超伝導状態になるが、強相関物質ではその温度は最高マイナス140℃（133ケルビン）にも達し、明らかに通常の金属とは異なる（室温で超伝導状態になる物質を創成することは、科学者の夢であり、目標である）。この高い超伝導転移温度は、強相関物質固有の特性であると考えられるが、なぜ超伝導温度が高いのか、どうすれば更に高くできるのか、という問いに対する答えは、数十年にわたる精力的な研究にも関わらず、未だ明らかではない。我々は、このような閉塞した研究状況を打破すると期待されている新しい新物質FeSeと TlFe_2Se_2 を合成することに成功し、世界でも最高性能を誇る大型放射光施設SPring-8において軟X線（光子エネルギー＝数100電子ボルト）により固体表面付近から超伝導に寄与する電子を直接取り出す「光電子分光」実験を行ってきた。その後、更にエネルギーの高い硬X線（光子エネルギー＝8000電子ボルト）により固体の内部から電子を取り出し、観測する実験を行った。

光電子分光実験では、固体中から取り出した電子の運動量と運動エネルギーを測定し、電子が固体中にいたときの状態（電子状態）を明らかにすることができる。電子状態がわかれば、その物質がなぜ半導体になったのか、その半導体にどのようなことをすると金属になるのか（例えば、圧力をかける、構成元素を別の元素で置き換える）などの知見に加えて、物質が超伝導になるときに2つの電子により造られるクーパー対がボーズ・アインシュタイン凝縮することによって形成されるエネルギーギャップの運動量空間における対称性も明らかになる。我々が2種類の異なる結晶構造を持つFeSeに対して得た実験結果からはFe（鉄）とSe（セレン）という2つの元素が特定の結晶構造の時にのみ超伝導を発現し、結晶構造の変化に伴って電子構造が大きく変化していることが明らかになった。また、理論モデルとの比較や新たな計算により、新物質FeSeが近年発見された超伝導体の中で、どのようなグループに属し、位置づけができるかを考察した。その結果、FeとSeの原子間距離が比較的大きいFeSeでは、FeとSeの電子の軌道の重なりが小さくなり、その結果、電子の見かけの質量が通常の3.5倍に増加して固体中を動きにくくなり、超伝導になる温度が低く抑えられているという結論に至った。今後、FeとSeの原子間距離がFeSeと異なる TlFe_2Se_2 について同様の解析を進め、超伝導になる温度の高い物質の創成の為の指針を決定し、その指針に沿った物質を合成する。

本チームでは、以下の内容で研究会を行った。今後も、多様な現実の中から将来の教育と生活への展望を視座に研究を積み重ねたいと考える。

ジョーンズ, プレント 「サービスマネジメント (Service Learning)」

This paper is intended as a progress report of my research into the pedagogic merits of service learning (SL) and how this impacts intercultural communication. A number of recent articles have reported on the successes of SL, and my review of the literature for tertiary settings has uncovered findings on the positive impact of service learning on self-concept, moral development, engagement and retention, and overall student learning. As outlined in previous reports, the focus of my inquiry is to find out how SL relates to other theories of learning and look for empirical evidence of these links. Specifically, I have been instigating a number of SL projects in Japan and the Philippines based on best practices and analyzing student reports for hints at how these projects are facilitating learning in various domains (cognitive, affective and interpersonal). In addition to categorizing excerpts from these reports, I have been proceeding with translation of student reports from Japanese to English and vice versa. Currently, I am planning a third Philippines Study Tour. In my final report, I will try to outline adjustments I have made to better facilitate deeper learning. The excerpts are too lengthy to include in this report, but comments from a number of students have pointed to the power of cognitive dissonance. Several students mentioned having certain expectations and then being surprised by what they saw or experienced in the Philippines. The implication for teachers is that we need to structure this type of cognitive dissonance into our lesson plans. Several students also mentioned their experiences working with the Teachers Helping Teachers (THT) volunteers. THT provides teacher training in areas where teachers do not have access to professional development opportunities. The comments highlight how impressed participants were with these teachers and their efforts. I believe these comments together highlight a link with apprenticeship learning. In conclusion, evidence so far supports the hypothesis that the power of SL is related to well established theories of learning, and that teachers can leverage pedagogical practices based on these theories to improve both the quantity and quality of learning.

中里英樹 「職場におけるダイバーシティマネジメントと子育て支援」

2011年度の主要な活動は次の2点に分けられる。

(1)仕事と生活の統合のための戦略的枠組みについての検討

これまでのインタビュー調査データの整理、先行研究の整理に基づいて、仕事と生活の統合のための枠組みと、取りうる戦略の多様性について検討した。

(2)オーストラリアにおける就業環境と子育て支援環境についての研究

具体的には次のような内容で研究を進めた。

- ・看護師の職場の公正感とワーク・ライフ・バランス意識の関連についての先行研究の整理を行った。
- ・労働時間と密接に関連する営業時間規制について、複数の州における、法制度および実態の調査を行い、南オーストラリア州における規制の意義について考察した。
- ・複数の州における統合的子育て支援システムの導入状況について文献整理および実態(予備)調査を行い、システムの統合性と地域ごとの多様性への対応を併存させるしくみについて考察を始めた。

藤原三枝子 「外国語および異文化学習における学習者の多様性と言語習得」

2010年度は、学習者のドイツ語の「学習開始動機」と「学習希望内容」が、1年間の学習における「動機づけ」や使用した教材のコンセプト評価および最終的な学習成果とどのような関係にあるか、などを質問紙を使って調査し、統計的に分析した。2011年度は、学習者にインタビュー調査を実施して、数量的なデータにお

いて見いだされた関連を質的なデータの助けを借りて意味づけし理解する研究方法をとった。インタビュー調査によって、学習者は高校までの英語教育をつうじて外国語の授業や教材に関して、多様な学習観を形成していることが分かった。彼らのこのビリーフが、特に、使用した教材の評価にかなりの影響を与えている可能性が示された。外国語教育の分析においては、量的研究と質的研究を融合する必要性が示唆された。

原田登美 「ソーシャル・サポートが『日本語能力向上の認知』に及ぼす影響」

2011年度は留学生を対象にホームステイの提供する「留学生活の適応を促す環境」と「日本語能力を伸ばす環境」の2種類のソーシャル・サポートが日本語能力向上の認知にどのように影響するかを調査した。主な結果は次の3点、1) 留学生はホームステイで日本語能力が向上していると認知し、その認知はサポートの提供と内容及びホームステイに対する満足度に関連していた。2) サポートの中でも特に「日本語コミュニケーションと文化理解の支援」「暖かい家庭・家族の提供」「いろいろな話題で話す」ことが留学生の「向上の認知」に影響していた。3) さらに、「向上の認知」はテストの聴解得点と聞き取り能力の自己評価と相関があった。以上のことから、ホームステイのソーシャル・サポートは留学生の「日本語能力の向上認知」に影響し、特に「聴解能力の向上」に効果的に機能していることが示された。

「日本と中国における企業間ネットワークの形成とその効果について

—企業間ストラテジックアライアンスとICTシステムの両面からのアプローチ—

No.116 研究幹事 杉田 俊明 (経営学部)

本研究チームの研究目的と2011年における研究成果について下記の通り中間報告を記す。

研究の目的

本研究は、日本企業の中国企業との企業間連携の在り方と、企業間情報通信技術 (ICT) システムの連携の両面から研究を進め、企業間、経営者間や経営組織間の連携を研究すると同時に、企業間のICTネットワークも含め、システムとしてのトータル的な連携ネットワークの形成を研究するものである。加えて、日本企業と中国企業間の新たな相互協力の枠組みの形成や日中の経済発展に新たなビジネスモデルを提案するものである。

2011年度の研究成果

2011年度における主な研究と研究交流は下記の通りである。

(1) 2011年7月28日～31日において、経営学部杉田俊明教授と知能情報学部岳五一教授は中国上海市を訪問し、企業間ICTシステムに関する現地調査およびこれらの研究課題を中心とする下記のワークショップをそれぞれ開催し、大学の研究者や企業の方々と広く意見交換を行ない、日本と中国の企業間、経営者間や経営組織間の連携に関して学術交流を行なった。さらに、最適化、階層的計画法、意思決定解析、ゲーム理論、金融管理、リスク管理などを中心に多くの優れた業績を挙げている中国科学院応用数学及びシステム科学研究院の院長をはじめ、研究者間で日中企業の経営戦略、経営組織、経営システムなどについて研究交流を行なった。

(a) International Workshop on Networks and Business Studies between Companies in Japan and China

Time: 14:00-17:30, July 29 (Friday), 2011

Venue: Shanghai HEADING Information Engineering Co., Ltd.

Co-Chairs: Prof. Wuyi Yue & Ms. Catherine Peng

講演者: Prof. Toshiaki Sugita, Mr. Xinsheng Hu, Dr. Xin Tian, Mr. Qinghong Chen.

Prof. Wuyi Yue

(b) Sino-Japan Workshop on Management and Business Studies

Time: 13:30-17:30, July 30 (Saturday), 2011

Venue: Room 302 Starr Building School of Management, Fudan University

Co-Chairs: Profs. Yifan Xu, Xiaoling Sun and Wuyi Yue

講演者: Prof. Jianqiang Hu, Prof. Qiying Hu, Prof. Toshiaki Sugita,

Prof. Wuyi Yue

(2) 2011年8月19日～22日、8月31日、9月1日において、中国・北京市にある北京航空航天大学経済管理学院、北京外国大学経済管理学院、中国科学院応用数学及びシステム科学研究院、北京郵電大学、北京交通大学などを訪問し、下記の研究活動を行なった。

- (a) 北京航空航天大学経済管理学院において杉田俊明教授と岳五一教授による企業間ネットワークに関する講演が行なわれ、関連テーマについて討論と交流を行なった。
- (b) 日本と中国における企業間ネットワークの形成とその効果について、企業間ストラテジックアライアンスとICTシステムの両面からのアプローチに関して、北京外国大学経済管理学院で下記のワークショップを行なった。

Workshop of Formation and Effect of the Networks between Companies in China and in Japan

Time: 14:30-18:00, August 22 (Monday), 2011

Venue: School of International Business, Beijing Foreign Studies University

Co-Chairs: Profs. Wuyi Yue and Jihong Zhang

講演者: Prof. Toshiaki Sugita, Prof. Xiaodong Yang, Prof. Wuyi Yue,

Prof. Ying Chen, Prof. Jihong Zhang

以上のように、本研究に関する研究成果の発表と多面的な学術交流を複数の大学と企業において行ない、討論も活発に行なわれた。これらの研究活動により、経営学的な視点からは日中企業における経営戦略、経営組織、経営システムなどの比較研究を行ない、両国企業における連携の実態調査とその連携の可能性を模索することができた。同時に、情報通信技術的な視点からは日中における企業内ICTシステムの構築度合いについて比較研究を行ない、システムの共通性や相違点などを研究のうへ、両国企業間における共有のプラットフォームを構築するためのモデルを模索し、その構築を検討することができた。特に、今年度は昨年度の経過を踏まえてより広範囲に、より具体的に日中両国の企業にとって有益で、日中間連携ネットワークの形成に寄与できる成果を得たと評価できる。

「平生飢三郎におけるイギリス的伝統」

No.117 研究幹事 中島俊郎 (文学部)

平生飢三郎と伊藤長蔵

本学の図書館に寄贈された平生飢三郎 (1866-1945) の蔵書は、きわめて興味深い人間関係とそこから派生する文化事象を伝えてくれる。

寄贈書の一冊に英語で書かれた、ゴルフ文献の稀覯書 *Golfer's Treasures* (London: St. Catherine Press, 1925)

が架蔵されている。編纂者は伊藤長蔵（1888-1950）であり、流布していた種々のゴルフ文献からの抜粋をあつめてゴルフ指南書としてのアンソロジーを編むために、ロンドン滞在中の伊藤が鋭意努力して紙質、印刷から造本まで神経を行きとどかせて編みあげたのが本書である。ケルムスコット・プレスの流れをくむアシエンディーン・プレスのC.R.ホーンビーから直接に教えをうけ、その造本精神を受けついでいる。

伊藤は、「ゴルフは科学的なゲームであるがゆえに、科学でもって説明し、科学的に習得しなくてはならない」と序文において、雄弁に主張し、チャールズ・ダーウィンの孫であるバーナード・ダーウィンが「瞠目する熱意で本書を編む」伊藤のすがたを前書きに記している。

ただ、抜粋した文章が不幸にも版權にふれるものがあり、絶版を余儀なくされたのであった。こうした経緯から編纂されたゴルフ本は稀観書になってしまうのであるが、この本の出版は伊藤に出版業を開眼させる契機を与えたのであった。

長蔵は播磨の素封家である伊藤家の次男として生まれた。兄の貴族院議員である伊藤長次郎は西本願寺の大檀越で、その縁で長蔵は大谷尊由と英国へ同行し、ゴルフに親しむことになる。

そして揺籃期の関西ゴルフ界には日商の会頭になる高畑誠一がいたが、長蔵のロンドン滞在中、高畑は鈴木商店ロンドン支店長で、名門アディントンの会員でもあった。帰国後、広野ゴルフ場の設計を実現するために高畑が依頼したのが伊藤長蔵であった。以後、伊藤はゴルフ雑誌『ゴルフドム』や解説書を日本で初めて出し、日本ゴルフ界のパイオニア的な存在になっていく。

ゴルフ界に貢献したのと同様に、伊藤は昭和初期の出版界の輝く星でもあった。出版社「ぐろりあ・そさえて」を起し、顧問には新村出、亀田次郎、神田喜一郎、石田幹之助などの錚々たる人士を後立てとして出版事業をはじめたのであった。愛書趣味が横溢する出版物を数多く出したが、現在も評価がゆるがない古典としてあおがれる著作を創業したころすでに出している。

没後百年にあたる年に詩人にして版画家であったウィリアム・ブレイク（1757-1827）の書誌を出そうという意図を新村に相談したところ、英文学者にして書誌学者である壽岳文章（1900-1992）が適任であろうと推薦され、新村を介して壽岳と伊藤は京都大学の図書館長室で会うことになる。昭和四年に出版された大冊『キルヤム・ブレイク書誌』は、「世界最大のブレイク書誌」（『日本の英学100年 昭和編』）と称されている。本学の「壽岳文章コレクション」に収蔵されている本書は、「ぐろりあ・そさえて」からの寄贈本である。壽岳文章はのちに甲南大学文学部英文科の礎を築くことになり、こうした交友にも目に見えぬ糸が張りめぐらされているのを知るのである。

そしてもう一冊は、昭和三年に出た柳宗悦の『工藝の道』であり、「柳工藝美学の基本的文献」とうたわれる名著であるが、壽岳が柳に伊藤を紹介してこの出版は実現したのであった。平生鈺三郎旧蔵書には伊藤長蔵が「ぐろりあ・そさえて」から定期的に出していた書誌学的研究雑誌『書物の趣味』（1932年3月、第7号で休刊）も架蔵されていることも追記しておきたい。

平生鈺三郎の精神的形成をなしたイギリス文脈を考察するとき、表面的な影響関係よりも伏流水のように流れている文化的水脈を探るのもきわめて重要なのである。平生、伊藤、壽岳をめぐると三者の関係については研究報告書で詳述し、平生のこれまで言及されなかった側面を浮きあがらせたい。

平成23年度研究チーム概要

◎研究課題 (No.118)

「高速計算手法による理論化学を基軸とした新機能物質群の高効率合成」

*研究の目的

光・電子デバイスを構成する有機機能物質の物性を計算し、将来の設計指針へとフィードバックする際、特に励起状態の計算が肝要である。本研究は、励起状態における計算の高速化、高精度化及びそれに基づく多様な新機能物質群の効率的合成を目的として、本企画を立案した。

*研究の内容および効果

本研究では、最先端光・電子デバイスにおいて実利用可能な高性能有機物質群の創製を計画している。具体的には、合成した有機機能物質のキャリア移動度、発光効率、発光寿命、応答速度などの物性を実測し、これに対して本研究提案で新たに構築する高速計算手法を用いた理論化学的考察を加えることで、さらなる高機能化のための設計指針を得る。合成、物性評価、設計のフィードバックを繰り返し行うことで、特に太陽電池やELディスプレイ、液晶ディスプレイにおいて実利用可能な新規有機物質群の創製を実施する。

有機物質は、分子を構成する元素が一つ置き換わるだけでも、全く異なる物性を発現する。つまり、個々の有機物質に対する量子化学計算が必要となるが、本研究提案で構築する高速計算手法を利用することで、迅速なフィードバックが可能になる。また、有機物質の励起状態を高速かつ精密に計算する手法の開拓は、現時点において未解決課題であるため、本研究を通じて得られる知見は、学内外、国内外問わず大きな波及効果をもたらすことが強く期待できる。

*総合研究として研究することの必要性

物質機能と密接な関係にある励起状態の計算を高速、精密に行うためには、実験、理論化学に立脚した新しいプログラミングや、複数コア、並列コンピューティングを駆使した高速計算環境の構築が肝要である。そのためには、有機合成化学、理論化学に精通する三宅（研究幹事）とプログラミング、高速計算環境構築に精通する永田（研究分担者）が連携して本研究を推進することが不可欠であるため、これらを構成員として含む本研究チームを形成するに至った。

*研究チームメンバーと研究課題

三宅純平（研究幹事）	理工学部	インディゴを基軸とした新機能物質群の設計、新規創製、物性評価
永田 亮	知能情報学部	化学計算プログラミングを基盤とした高速計算環境の新規構築

◎研究課題 (No.119)

「甲南大学における教育哲学 ―学生の心に響く大学教育の実践に向けて―」

*研究の目的

- 甲南大学は、「個性を力へ。」を学生教育の主眼に置きつつ、「徳育・体育・知育」の実践による人材育成を続けてきている。また、教育基本方針として、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを各部局ごとに策定し、これを理念としている。一方で、わが国を含め世界的に見ても社会基盤が大きく変化を遂げた1990年代に生まれ、中等教育を受けて育ってきた世代が学生の大半を占めるようになりつつある。20世紀後半、特に1980年代以降に大学教育を受けた世代が教員組織の中核的立場になってき

ている現在、学生自身の意識の変化は大きく変貌を遂げており、教員が学生であった時期の経験に基づく教育現場と比較すると隔世の感があることは否めない。このような時代の流れを受けて、教育する対象である学生の心の拠り所の変化に対応できる「学生の心に響く大学教育とは何か？」について、本学の事例を中心に調査研究し、本学の教員がもっている教育哲学について包括的にまとめ、本学の教育水準を高めるとともに持続的な人材育成に貢献する。

* 研究の内容および効果

本研究では、学生の心に響く教育を推進するための拠り所を見いだすべく、実際の大学教育の現場で練り広げられている教員と学生との葛藤を調査研究していく。最近では、講義に対する学生の受講マナーの悪化が問題とされ、ファカルティー・ディベロップメント (FD) 委員会が主導となって改善策を検討している。教員の講義スキルを向上させていくことが重要とされているが、本研究の申請者らは「講義自体、教員自体に魅力があって、受講することの有り難み」が重要ではないかと考えている。すなわち、講義を真剣に受講しなければ損をするという気持ちが学生の中に芽生えるよう工夫すべきであると考えた。この中で、教育・講義の方針には「管理」と「放任」の対極の考え方が存在し、また教育対象である学生の立場には「まじめに取り組む」と「楽をして乗り切る」の二つの姿勢が存在すると作業仮説をたてた。これらの対極的な考え方や姿勢の無数のマッチングにより、日々の大学教育が進行している。社会情勢が刻々と変化するに伴い、教員組織および学生組織の意識の変化も徐々に移ってきている。このような変化にいち早く対応し、追従するために、教員の立場からみた管理と放任による学生教育におけるメリット・デメリットを検証する。特に、本学の各部署の教員を対象に個別にヒアリングを実施し、それぞれの立場に基づく考え方を集積してまとめていく。一方で、各学部学科に所属する幅広い学年の学生を対象として座談会を実施し、まじめに取り組もうとするあるいは楽をして（場合によってはずるく）取り組む姿勢にさせる大学教育における問題点の本質について調査検証する。

このように本研究では、教員と学生のそれぞれの立場を尊重した上で、現場でのヒアリングを主体として情報の集積を進め、一般的にみられるアンケート調査は基本的に行わない。このため、抽出される内容に幅と深みが増し、教育哲学をまとめていくための基盤となる。ここでまとめられた研究成果を、本学内にて広く共有することにより次世代の学生にも対応できる教育が実践できる。

* 総合研究として研究することの必要性

甲南大学は開学時に文理学部を設置しており、本年で開学60周年を迎える。この節目の時期に、母体となった理工学部と文学部の教員が研究チームを組んで、学内の学部・学科の壁を越えた総合研究として、本研究である「甲南大学における教育哲学」が企画された。学内の各部署を研究調査の対象としており、総合研究所における研究として推進することが最適である。

* 研究チームメンバーと研究課題

渡邊 順司 (研究幹事) 理工学部

研究幹事を担当するとともに研究内容の企画立案をし、「大学教育における管理と放任について教員へのヒアリングによる調査研究」を行う。また、菅教授の研究テーマの推進をサポートする。

菅 康弘 文学部

「学生との座談会における修学意識を左右する本質についての研究」を行う。

◎研究課題 (No.120)

「多言語Wikipediaの差異情報抽出手法に関する研究」

*研究の目的

インターネットの普及で海外の情報が容易に取得できるようになったにもかかわらず、若者の海外留学及び海外旅行が激減している等、若者の海外への興味が以前より薄くなっている。本研究ではWeb上の多言語による情報の差異を抽出し、提示することにより、若者が海外へ興味を持ってもらう事を目的とする。

*研究の内容および効果

【研究内容】本研究では、日本及び海外の伝統文化に注目し、機械翻訳を使用して多言語Wikipedia上の伝統文化の記事を比較し、その差分情報を自動で取得するシステムの研究開発を行う。さらに、日本人学生及び外国人学生を対象に、評価実験を行い、実際に自分の国の文化が他国でどのように紹介されているのか、また逆に自国で紹介されている他国の伝統文化は実はどのような物なのか取得できているかの評価実験も行い、システムにフィードバックする。ここで比較対象の言語を日本語-英語のみならず、日本語-中国語または韓国語等アジア圏の言語も対象とする。例えば、日本人学生の場合、日本の伝統の一つである「下駄」は海外でどのように紹介されているのか差異情報を取得し提示する。またイギリスの伝統である「クリケット」は日本ではこのように紹介されているが、実は本国イギリスではどのように紹介されているか差異情報を取得し提示する。

【研究効果】本研究により、日本と外国との各々の伝統文化の紹介内容の差異情報を容易に取得することができるようになり、ユーザの海外への興味を持つことが期待できるのみならず、インターネット上の情報を比較考査することの利便性を通じて文字情報、静止画動画の画像を豊富に連携させ理解を深めることができる。通常、言語の違いにより障壁となり深い理解に結びつかず、表層的に理解され、実体験しようとする次段階への興味付けへと結びつきにくい異文化理解をシステムを行使することで言語を超えて日本人と外国人との異文化コラボレーションのきっかけになることが期待できる。

*総合研究として研究することの必要性

本研究は比較手法の提案やシステム構築だけでなく、多言語間における文化の違いの理解や、複数言語による実証実験を行い、その結果をシステムに反映させる必要がある。その為、コンピュータの専門家（コンテンツ解析の専門家）だけでは遂行できず、国際交流の専門家の知識が必要である。故に、知能情報学部の灘本と国際交流センターの小西が連携して総合研究として研究する必要性は明確である。

*研究チームメンバーと研究課題

灘本 明代 (研究幹事) 知能情報学部	・多言語Wikipediaの比較手法の提案
H23年度	1. 比較対象Wikipediaの抽出 2. 差異情報抽出手法の提案
H24年度	1. 差異情報抽出手法の多言語対応 2. 単語の多義性の問題の解決
小西 幸男 国際交流センター	・多言語間の文化の違いに関する研究
H23年度	1. 翻訳時の単語の多義性の問題抽出 2. 日英：実証実験及び差異情報抽出時の問題抽出
H24年度	1. 日中韓：実証実験及び差異情報抽出時の問題抽出

◎研究課題 (No.121)

「Impact on the L2 Writing Ability of Learners by Explicit Teaching of an ICT-mediated Genre-based Approach to Writing」

〔日本語訳：情報通信技術 (Information and Communications Technology) を媒体とするジャンル・ベース・アプローチ・ライティングによる明示的指導が学習者の第2外国語ライティング能力に与える影響〕

*研究の目的

言語学習は社会的活動の一環であり (参照: Vygotsky, Bakhtin)、学生は協力し理解し合うことで言葉を学んでいきます。つまり、その外国語を通して実体験から学習し、その言語に関する知識を養い、会話する能力を伸ばしていきます。

この研究の特徴はICTを利用することで、オンライン教材だけでなく教科書を用いて教室内外における学習環境をつくり、ジャンル・ベース・ライティングを取り入れた指導、学習を可能にします。テクノロジーを用いてのジャンル・ベース・ライティングのアプローチの効果は、これまでに調査されていないため、研究したいと考えています。

これにより、学習者は教室の内外で従来の教材に加え、オンラインの教材を用いて新しい協体制を築くことが出来ますが、これは予算次第です。本研究は、インターアクティブ電子ホワイトボードを西宮キャンパスで (全体授業形式で) 使用し、インターアクティブ・パッド (個人使用) とポータブル電子ホワイトボードを組み合わせて、西宮キャンパス、岡本キャンパス、甲南高校をつないで実施します。これは、学生のライティングを修正、編集したデータを追跡し、学力の伸びを測定する効果的な方法です。学生がペンで書き取ったデータが保存されたメモリをもとに細やかなフィードバック (評価やコメント) を提供できるので、学生の関心と動機の向上に結びつく大きな利益をもたらします。

したがって、この研究はライティングのプロセスをも指導することができる全く新しいアプローチを生み出すと考えられます。

その他の主な目的は以下のとおりです：

- ・学生がライティングする際のプロセスやその流れを実際に電子手段で把握し、時間差のあるコミュニケーションの認知的・社会的プロセスをより理解するため
- ・日本の大学、高校での英語の授業におけるジャンル指導を研究、評価し、学生が外国語でライティングする際にどこが難しいのかを認識することで、より上手な文が書ける能力を養うため
- ・教師がジャンル・ベース・ライティングによる指導法を理解し、その利点を実証するため
- ・学習者が実践的かつ機能的に文章が書けるように、適切で効果的に教師がジャンル指導できる教材を開発する
- ・ライティング指導の質的な飛躍が可能となる最新技術を利用することで、教師の指導技術や能力を伸ばすため

オーストラリアではすでにライティングのジャンル・ベース・アプローチの成功例が確認されており、それに携わったオーストラリアの研究チームのスタッフと共にインドネシアを訪問し、現地の24ヶ所の学校で行われている大規模なプロジェクトを観察する予定です。最新テクノロジーを使用することによるライティングの指導、学習の効用はまだ調査されていません。

ゆえに、本研究の調査質問、仮説は以下の通りです：

1. 学生はコミュニケーション能力やジャンルに対する意識がたいてい欠けているため、彼らが何を理解しているのかや、新たな試みでどんな効果が現れるのかを調べる
2. 一学期にわたるジャンル・ベース・ライティングの明示的指導により、80%以上の学生が自分自身でジャンルを意識し、そのライティング能力を発揮できるようになるか
3. ジャンルに焦点をおいて明確に説明されている教材を使うことで、ジャンル・ベース・アプローチをよく知らない教師に影響を与えることができるか

*研究の内容および効果

この研究の特徴は学習者同士を結びつけて協力体制をつくるために、テクノロジーを利用することです。Blended learning（教室とインターネットを組み合わせた教授・学習形態）の分野において、その効果は確立されているものの、特にジャンル・ベース・アプローチへの応用はまだ実践されていません。ICTを利用することで、学生が都合のよい時や場所を選んで各自のペースで学習できるだけでなく、他の学習者とオンライン上で関わり、そのグループの一員となって相互に新しい手段を追求することが可能になります。

技術により強化され、統合されたジャンル・ベース・ライティングにより、学習者がより広く、深く、より多く関わりを持てるので、彼らのライティング能力が向上すると期待されます。例えば、学習者のライティングにおけるコミュニケーション能力を文章様式で分析することにより、それが立証できると考えています。調査対象のグループによるアウトプットを観察し、研究の実施前後で評価し、特にICTを利用せず、ジャンル・ライティングも実施していない類似レベルの学習者で構成される制御グループと比較します。

一年目（2011年）は、CUBEにてthe Peace as a Global Language Conferenceという学会を主催することになっており、学習者はジャンル・ベース・ライティングの指導をうけたうえで、平和についてのエッセイを書き、優秀者を表彰する予定になっています。集まったエッセイは学生が書いたジャンル・ベース・ライティングのサンプル例として本にまとめたかと考えています。二年目（2012年）は、JALT CALL（Computer Assisted Language Learning）の学会でフォーラムが開かれるので、ICTによるジャンル・ライティング指導と学習について発表します。特にジャンル・ライティングと最新技術がいかに学習者の動機づけ、正確さや流暢さに有意な相関関係をもたらすか、また、学習者がどれほどコミュニケーションライティングが出来るようになるのかを把握したいと考えています。また、この年に国際学会のセミナーで発表し、インドネシアで行われる学会においても成果を発表する予定です。さらに査読つきの定評のあるジャーナルにも論文を投稿するように取組みます。

そのうえ、私たちの授業を観察しに訪れる海外からの研究者も歓迎し、また、逆に彼らの授業を観察し、研究結果を共有するために彼らを訪問します。インドネシアの研究チームは、彼らの予算で日本への訪問を予定しているため、我々は彼らを訪問し授業を観察して、自分たちの研究や指導と比較するために予算が必要です。そして、教育効果を比較分析した上で、結論を導きたいと考えています。

最後に、甲南大学の西宮、岡本キャンパスにて、技術を応用したジャンル・ベース・ライティングに関する教師向けのフォーラムを日本でコーディネートするなど、新たな取組みのイニシアチブをとり、研究領域の幅を広げていきたいと考えています。

研究成果としては：

- 国際的に定評のある査読つきのジャーナルに論文を投稿・発表する
- 国際学会にて論文を発表する
- 学生がジャンル・ベース・ライティングによって書いた例文をまとめて編集し、出版する
- 甲南大学の西宮、岡本キャンパスにて、ジャンル・ベース・ライティングと技術の応用に関するフォーラムをコーディネートするなど、日本の研究者に新たな取組みを紹介してイニシアチブをとる

テクノロジーを駆使してのジャンル・ライティングは学習者の動機づけ、ライティングの正確さ、流暢さを養うのに貢献するという点で、魅力のある可能性を広げます。学生が教室の内外でこのようなテクノロジーを利用して協力し合うことで、さらに積極的な参加が期待され、また、学生自身が何をいつ、どのように学習するのかを決める個人媒体の立場も育成します。したがって、テクノロジーの利用による第二外国語の指導と学習（特にライティングによるコミュニケーション）においては、さらなる動機の向上が期待されると考えられます。

*総合研究として研究することの必要性

- ・ 研究プロジェクトを可能にする技術への投資となるため

例) インターアクティブ電子ホワイトボード

- ・インドネシアの学校における授業観察、発表に費用が必要なため
- ・出版に費用が必要なため：総合研究所のジャーナルに出版が可能となる

*研究メンバーと研究課題

バーマー・ロジャー（研究幹事）

マネジメント創造学部専任講師

ジャンル・ベース・ライティングにICTを適応し、教室内で使う教材やオンライン教材を統合プロジェクトとICTの管理、インドネシアにおける授業観察と発表、西宮キャンパスでの授業、ICTによるジャンル・ベース・ライティング指導、リサーチ・メソッド、データ収集、論文執筆、等

ルーオー・グレッグ

マネジメント創造学部特定任期教員

ジャンル・ベース・ライティングのサンプル作成（大学・高校）、インドネシアにおける授業観察と発表、西宮キャンパスでの授業、ICTによるジャンル・ベース・ライティング指導、リサーチ・メソッド、データ収集、論文執筆、等

吉田 佳代 国際言語文化センター専任講師

TOEFLライティング、岡本キャンパスでの授業、ICTによるジャンル・ベース・ライティング指導、リサーチ・メソッド、データ収集、論文執筆、等

吉田 和史 甲南高校英語教員

高校の英語授業でのICTによるジャンル・ベース・ライティング指導、授業観察、データ収集、等

◎研究課題（No.122）

「小・中学生向け「地域語教材」開発のための基礎的研究

—新学習指導要領「生きる力」における「言語活動の充実」のために—

*研究の目的

副題に示すとおり、平成23年度から実施される小中学校新学習指導要領において、「言語活動の充実」が重要な課題として掲げられている。本研究の目的は、言語活動の根幹となる、児童・生徒が母語(母方言)を客観的に見つめ直す機会を提供する教材の作成を目標に、必要な資料・情報の収集を行うことである。

*研究の内容および効果

新学習指導要領における言語活動の「指導事例集」が文部科学省のホームページに挙げられているが、地域語(方言)に関するものは挙げられていない(2011年1月30日現在)。しかしながら周囲の人間との「あいさつ」から始まる言語活動において、地域語の問題を抜きにすることは考えられない。

兵庫県では、高校生を対象とした『兵庫県ことば読本』(兵庫県高校教育研究会国語部会編)が作成され、活用されている。同書(本研究の研究員である橋幸男が編集責任者)では、高校生が行う研究という点にも力点が置かれているが、本研究では小・中学生向けの地域語入門書(兵庫県を対象)を作成することにより、学校現場での地域理解学習に資する教材を作成するための諸課題について多角的に研究する。

上述のように、本研究の成果をもとに作成された兵庫県方言の地域語読本は、小・中学校の教育現場での「言語活動」の基礎固めとなるとともに、地域学習の推進力となるであろうと考える。

***総合研究として研究することの必要性**

本研究では、方言研究を専門分野とする教員と、国語教育を専門分野とする教員の協同、さらには、分担者以外に本学卒業生の小・中学校教員の協力を得ながら、研究・教育・学校現場それぞれの立場からの意見交換を行い、成果をまとめることができる。

***研究メンバーと研究課題**

都築 直也 (研究幹事)	文学部	兵庫県方言の実態調査・研究
橘 幸男	教職教育センター	国語教育における地域語の活用 兵庫県方言の研究
黒崎 良昭	園田学園女子大学 未来デザイン学部	国語教育における地域語の活用 兵庫県方言の研究

